

## 思い込みという魔法—『オズの魔法使い』—

19L066 谷口 晴香

### はじめに

児童文学の中でもその名がよく知られている『オズの魔法使い』(L. Frank Baum, *The Wizard of Oz*, 1900) は、今では映画やミュージカルなどにより文章を読まなくてもストーリーが理解できるようになっているが、本来の内容を知っている人は少ないだろう。しかし、アメリカでは出版された直後から今までずっと愛されてきた作品である。なぜこれほどまでに人気を博したのだろうか。ジャック・ザイプスは、その理由を以下のように述べている。

『オズの魔法使い』のような長編ユートピア物語が古典としてずっと人気を保ってきた例は珍しい。たしかにこれは、このおとぎ話の純真な作風のせいでもあるだろう。この作品は、私たちを取り巻く灰色の世界から抜け出す道を照らし出し、私たちの創造的なエネルギーを目覚めさせてくれ、私たちは夢を諦めることなく、なりたいたいと思うものになれるのだということを示唆してくれる。W・W・デンスローのすばらしい挿絵のついた『オズの魔法使い』は、1900年に出版されるとすぐにアメリカの幼い読者を惹きつけ、1902年にはミュージカルになって、あっという間に大人をも魅惑してしまった。その後この第一作に続く十三冊の続編に、世界中の子どもばかりか大人までが魅了された。1939年には、部分的にアニメーションが入ったミュージカル映画がつくられ、ジュディ・ガーランド、バート・ラー、レイ・ボルジャー、ジャック・ヘイリーらの演技は忘れがたいものとなった。このMGM映画の不朽性が付け加わって、このおとぎ話の古典性は保証されたのだった。「虹のかなたに、わたしが夢みた国がある」のメロディは何百万もの観客に、オズの国への旅をすればその体験がきっとこの国の状況を変えるだろう、という希望を与え続けている。<sup>1)</sup>

この作品が政治の寓話だと述べる人たちがいる。大恐慌の真ただ中に生きる労働者への救済が盛り込まれているのだという。19世紀後半のアメリカといえば深刻な経済不況に

陥り、たくさんの労働者階級の人々が職を失い路頭に迷った。一説では、かかしは農民、ブリキ男は労働者、ライオンは兵士、そして悪い魔女たちは権力者を表すとされている。<sup>2)</sup> 虐げられた民衆が横暴な権力者に打ち勝つという構図は、時代が移り変わってもなお多くのアメリカ人の心に訴えるものがあるのだろう。

本稿ではしかし、そのような寓話的な解釈ではなく、『オズの魔法使い』における魔法の性質について考えてみようと思う。と言うのも、それこそが現実的で努力を重んじるアメリカン・ドリームに相通じており、アメリカ人としてのアイデンティティを想起させるものだと私は考えているからだ。

## 「オズ」の国での魔法

アメリカの社会背景も相まって人気を博した『オズの魔法使い』だが、どのような類の魔法が使われていたのか、「思い込み」をキーワードに内容の要約を含めて見ていこう。

カンザスに住んでいる主人公のドロシーと犬のトトは、ある日突然竜巻に襲われて家ごと吹き飛ばされてしまう。竜巻に乗って辿り着いたのは、「オズ」という不思議な国だった。オズの国は東西南北に分かれており、4人の魔法使いがそれらを支配していた。東と西の魔女は悪い魔女、北と南の魔女は良い魔女だ。そしてオズの国を支配している王こそが、オズ大王である。東の悪い魔女は、ドロシーがオズの国に降りた時に彼女の家に潰されて死んでしまった。ドロシーは故郷に帰るため、オズ大王に知恵を貸してもらおうとエメラルドの都へ向かう。その時に、悪い魔女を倒してくれたお礼にと、北の魔女がドロシーの額にキスをしてくれた。北の魔女は、「私にキスをされた人は、どんな攻撃からも身を守ることができますからね。」と言った。<sup>3)</sup>

この冒頭の部分では、「北の魔女のキス」が思い込みの対象になっていると考えられる。この後に続くドロシーとトトの旅では、あらゆる森や町の住民、そしてオズ大王までもが彼女の額のキスの印を見て、手助けをしてくれる。しかし、北の魔女が実際に助けていたのかどうかは最後まで分からずじまいだ。本当は魔法のキスなどではなく、相手を元気づけるための儀式だったとしたら、ドロシーは「自分は守られている」と錯覚しながら冒険していたことになる。すると、ほんの小さな幸せに出会ったときにも「きっとあのキスのおかげだ」と思えるのではないだろうか。そんな思い込みによる噂が次第に大きくなり、国中を巻き込んでいるのかもしれない。

さて、ドロシーとトトは旅の途中で3人の仲間に出会う。脳みそが無いのかかし、心が無いブリキのきこり、そして臆病なライオンである。彼らは自分たちに足りないものをオズ大王に与えてもらうため、ドロシーと一緒にエメラルドの都へと向かう。

美しい街と危険な森をいくつも越えると、エメラルドの都に辿り着いた。どこも緑色に塗られており、そこかしこにエメラルドが埋め込まれている。あまりにもその宝石が輝いていて眩しいため、メガネをかけなければならないほどであった。都に入っていくにつれ、住人の肌の色までもが緑色をしているように見えた。4人はさっそくオズ大王に会おうとしたが、宮殿の兵隊たちですらオズ大王を見たことがないと言う。ただ噂によると、オズ大王は自由自在にその姿を変えることができるようだ。

やっとのことで、面会するのは1日1人だけという条件のもとオズ大王に会う許可が出た。最初にオズ大王に会ったのはドロシーだ。オズ大王は手足のない大きな頭だった。ドロシーが「カンザスに帰してほしい。」と頼むと、オズ大王は「西の魔女を倒して来たら帰してやろう。」と言った。

その次の日に会ったのはかかしだ。オズ大王は羽の生えた美しい女性だった。かかしが「僕に脳みそをください。」と頼むと、オズ大王は「西の魔女を倒して来たら脳みそをたっぷり授けましょう。」と言った。

そのまた次の日に会ったのはきこりだ。オズ大王は大きくて恐ろしい獣だった。きこりが「僕に心をください。」と頼むと、オズ大王は「西の魔女が死んだら、おまえに心をやろう。」と言った。

最後に会ったのはライオンだ。オズ大王は大きな火の玉だった。ライオンが「私に勇気をください。」と頼むと、オズ大王は「西の魔女の息の根を止めてきたら、そちに勇気を授けよう。」と言った。

4人とトトは西の魔女を倒すため、また旅に出た。

オズ大王は4人それぞれに別の条件を与えたのではなく、4人ともに「西の魔女を倒してくること」と命令した。しかしよく考えてみると、なぜそんなことを言ったのだろうか。オズ大王は偉大な魔法使いなのだから、自分で倒しに行けば良いではないか。ドロシーたちもオズ大王が偉大な魔法使いだということくらいは知っていた。国中の人たちがそのような言うからである。しかし、エメラルドの都の兵隊でさえも彼に会ったことがないように、国中の人たちもまた、彼が魔法を使うところを目の当たりにしたことがなかった。

ドロシーたちは西の魔女が住んでいるところに到着したが、かかしときこりは身体を壊され、ドロシーとトトとライオンは魔女に捕まってしまった。捕まった彼らは魔女に脅さ

れてせっせと働くが、意外にあっけなく魔女は死んでしまうことになる。魔女は水が苦手だった。ドロシーはそれを知らずに魔女に水をかけてしまったのだ。魔女はどんどん溶けていき死んでしまったため、ドロシー、トト、ライオンは自由を取り戻し、かかしときこりも助けることができた。

噂というものは一瞬で広まるが、広まる途中で二重にも三重にも加工されていく。特に何も知らない人が噂話を聞くと、それがその人の現実になってしまうことだってある。つまり、ただの思い込みに過ぎないのである。

西の魔女もまた、国中で知られる怖い魔女だった。なぜなら彼女に会ったら奴隷にされるか、殺されるかのどちらかだからだ。しかし、「強い魔女だったのか？」と聞かれたら、案外そうではなかったのかもしれない。恐怖という感情は人々の心を支配する。すなわち思い込みによる噂は良い方向に向くこともあれば、悪い方向に向くこともあるのだ。

オズはドロシーたちが魔女を倒したと聞くと、少し驚いたようだったが、今度は4人揃って面会をさせてくれた。しかしトトが誤って部屋の盾にぶつかってしまい、それが音を立てて倒れた。すると、その裏には背の低い中年の男が立っていた。なんとオズの正体はただの人間だったのである。彼も竜巻に乗ってこの国へ来たのだが、自分を偉大な魔法使いだと勘違いされたため、そのまま嘘をつき続けて王となったのだった。ついでに、街のものすべてが緑色に見えていたのも、緑色のレンズのメガネをかけさせられていたからだった。オズは優秀なペテン師なのである。

しかし彼は、かかしときこりとライオンにはきちんと望むものを与えた。それからドロシーには気球を作ってあげ、自分と一緒に故郷に帰ろうと計画していたのだ。

オズは彼らに脳みそ、心、そして勇気を与えたわけだが、もちろん魔法なんて使えないため、形だけのものだった。しかしそれを知らない彼らは本当に自分たちに力がついたように思った。思い込みの力は良い方向にも悪い方向にも向く、と先述したが、このシーンがどちらを指すのかは想像ができるだろう。

## おわりに

果たしてオズの国には本当に魔法使いが存在したのだろうか。魔法の帽子や靴は出てくるが、誰かが魔法を使うシーンは特に描かれていない。しかも、国を治めていたオズはただの人間だったのに、彼の嘘と人々の勘違いのせいで偉大な魔法使いになりきっていた。

結論を言えば、彼が魔法使いかどうかなんてどうでも良いのだ。事実ほとんど思い込みだったにせよ、彼に救われた人たちがたくさんいるからだ。誰かを救うことは簡単ではないし、嘘を国中の人たちに信じ込ませることも容易ではない。それこそがオズの使った魔法なのである。そして、北の魔女のキスや、かかしに与えた形だけの脳みそからも分かる通り、本当の魔法とは「思い込むこと」なのではないだろうか。

思い込みこそが魔法であり、魔法はエンターテインメントとして私たちのすぐそばにある。「信じれば叶うとまでは言い切れないが、小さな幸せは手に入れることができる。」それを教えてくれるのが『オズの魔法使い』だろう。

以下の引用は、ドロシーとトトが魔法の靴を使って故郷のカンザスに帰った後のシーンである。

……トトはドロシーの腕から飛びだすと、うれしくてたまらなそうに吠えながら、納屋のほうへ走っていった。

その場に立ちつくしていたドロシーは、自分が靴下だけになっているのに気がついた。銀の靴は、空を飛んでいるあいだに脱げ落ちて、永遠に砂漠のなかに消えたのだった。<sup>4)</sup>

さて、魔法の靴は本当に存在したのか。魔法の靴の正体も「思い込み」だったとしたら、オズの国とカンザスはそう遠くないのかもしれない。

---

## 註

- 1) ジャック・ザイプス『おとぎ話の社会史 文明化の芸術から転覆の芸術へ』新曜社、2001年、203-204頁。
- 2) 室谷哲「ポピュリズム外伝——『オズの魔法使い』考」『アメリカ経済誌研究』第2号、2003年9月、65-69頁参照。室谷はリトルフィールドやハーツガードの議論を紹介し、一部採用している。
- 3) 作品の要約にあたっては、ライマン・フランク・ボーム『オズの魔法使い』新潮文庫、2012年を参照した。
- 4) ボーム、238頁。

## 参考文献

ライマン・フランク・ボーム『オズの魔法使い』河野万里子訳 にしざかひろみ絵 新潮文庫 2012年  
ジャック・ザイプス 『おとぎ話の社会史 文明化の芸術から転覆の芸術へ』鈴木昌・木村慧子訳 新  
曜社 2001年  
室谷哲 「ポピュリズム外伝——『オズの魔法使い』考」『アメリカ経済史研究』第2号、2003年9月

(指導教員 金山 愛子)